

## 根本幽峨の画業と修業期の絵画学習

山田 修平（鳥取県立博物館）

根本幽峨(1824-66)は幕末に活躍した鳥取藩絵師であり、現在も鳥取県東部を中心に、その名を知られる。幽峨は鳥取城下の商家に生まれ、江戸に上り(以下、江戸に上ることを「東上」とする)鳥取藩絵師 沖一峨(1796-1855/61)に師事した。鳥取藩政資料(鳥取県立博物館蔵)では、1858年に藩絵師として登用される以前より重要な御用を任せられ、若くして重用されたことがわかる。二十代半ば頃の代表作《平家物語 宇治川先陣・弓流図屏風》(渡辺美術館蔵)は、大画面ながら謹直な線で画面の隅々に至るまで手を抜かずに仕上げられており、幽峨の早熟ぶりが窺える。その一方で、藩絵師就任前後に描いたとみられる《老子・山水図》(1855年、個人蔵)や、《蝦蟇張果老・山水図》(個人蔵)など、夏珪、梁楷、馬遠らの倣古図、《琴棋書画図》(鳥取県立博物館蔵)のように、伝・任仁発の原本の図様に倣いつつも大幅な改変を加えた作例を見出すことができる。こうした宋元画にある程度忠実に倣った作例は、一峨の作品・資料には見いだせず、幽峨の画業を一峨からの影響のみで語ることの難しさを感じさせる。

本発表では、幽峨の修業期における絵画学習の様相を明らかにし、藩絵師登用前後の幽峨がどのような絵画制作を志向していたかを考察したい。今回、幽峨の修業期の絵画資料(京都国立博物館蔵、以下、幽峨絵画資料)を調査する機会を得た。幽峨絵画資料からは、①現段階で確認できる「幽峨」号の初出が1842年であり、これ以前に東上したと考えられること、②1843年から47年にかけて制作された幽峨の模本に、狩野信、養信を中心とする木挽町狩野家の模本を写したものが多数確認できること、③②が中国絵画・やまと絵の重模本類であることなどがわかった。また、幽峨が2度目の東上を果たした1852年頃から54年にかけて、款記に「養正」という諱を記した作品を多数見出すことができた(1855年から元の諱である「誠正」に戻る)。よって、幽峨は一峨に師事しながらにして養信に師事した、或いは養信門下にあった画家のもとで図様を学習した可能性が高い。先述の《老子・山水図》などがこうした木挽町狩野家に伝来した図様を学習した成果であると考えられる一方で、幽峨粉本資料では一峨の写生図を模写した資料も確認できた。藩絵師就任前後に描いたとみられる《四季花大和人物図貼交屏風》(渡辺美術館蔵)、《女酒宴図》(個人蔵)から、写実味と装飾性を兼ね備えた花鳥画の表現、真景図表現などを一峨から受け継いでいることもわかる。

よって、幽峨の画業においては、一峨を通して学んだ各派の画法と、木挽町狩野家に蓄積された模本類の学習によって得られた図様の蓄積がそのベースに存在する。一峨から受け継いだ多様な表現のみならず、木挽町狩野家の模本等を学び、当時の江戸狩野派の正統的な絵画制作手法を学んだことを示すことで、同時代の国元の画家たちとの差別化を図っていたものと考えられる。